
現代社会 + RPG

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現代社会＋RPG

【Nコード】

N6176V

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

いろいろこつちやになってます（笑）よろしく！

主人公…タケダ・ナオト（サラリーマン）
主人公の妻…アヤコ
さらわれた女性…エリカ
エリカの父…シライシ部長
ラスボス…クロダ

「起きなさい…起きなさい…てめえ、さっさと起きやがれ！」
”ゲシッ”

蹴られるナオト。ナオトは痛みと共に起きた。

「このねぼすけが！何時だと思つてやがる！」

妻のアヤコは怒っていた。結婚して3年。まさかこんなドメステイックバイオレンス・ウーマンだったとは…。

「まったく…」

台所に行くアヤコ。トイレに行き、洗面所で顔を洗うナオト。

「ほら、弁当」

ナオトはお弁当を手に入れた。

「遅刻すんなよ。じゃ、いつてらっしゃい」

ナオトは家を出た。

- ナオトの装備
 - ・黒いかばん
 - ・安物のスーツ
 - ・古い革靴
 - ・結婚指輪
- ナオトの道具

- ・お弁当
- ・ハンカチ
- ・ボールペン

ナオトはコンビニに入った。

「ここはコンビニだ。何を買うかね？」

- ・おにぎり
- ・野菜ジュース
- ・エッチな本

ナオトの所持金。3000ゴールド。じゃなくって3000エン。
ナオトはおにぎりと野菜ジュースを買った。

「まいどあり！また来てくれよな！」

ナオトの所持金。2800ルーブル。じゃなくって2800エン。
ナオトはおにぎりを食べ、野菜ジュースを飲み、電車に乗った。

30分後。最寄りの駅に着いた。ナオトは会社に向かった。

「おお！ナオト、待っておったぞ」

「？」

「実はわしのかわいい娘が誘拐されたんじゃ！」

「誘拐？」

言い忘れたが、彼は部長のシライシ。なぜかナオトを気に入っている。

「もはや希望はお前しかおらん！どうか娘を救い出してくれ！」

「ど、どうして僕なんですか？」

「だってお前は主人公じゃろ？」

「主人公？」

「とにかくこれは部長命令だ！よいな？」

「いいえ」

「なんと！？…そう言わず救い出してくれ！」

「いいえ」

「なんと！？…そう言わず救い出してくれ！」

「はい」

ナオトは嫌だったが、なんとなく断つても無駄だと感じたので了解した。

「おお！さすが勇者…じゃなくて勇敢なるわしの部下じゃ」

「いま、勇者つて言つたろ…？」

「よし！そうと決まれば、まずこれを見てくれ」

シライシ部長は紙切れを出した。

「今朝、これがわしの家のポストに入っておったんじゃ」
「…」

そこにはこう書かれていた。

”娘は誘拐した。3丁目のアリアハンビルに來い”

「頼むナオト君、アリアハンビルに行つてはくれまいか？」

「なるほど…」

「そうじゃ。この鍵を持っていくがいい」

シライシ部長は盗賊の鍵をナオトに渡した。

「な、なんですこれ？」

「これがあれば、黄色いドアの鍵が開くだろう」

「なんですか、それ…」

「とにかく頼んだぞ。行け、勇者ナオトよ！」

「あーあ…言っちゃったよ…」

とりあえず、ナオトは盗賊の鍵を手に入れた。

ナオトは部長やら課長やら平社員やらに見送られ、会社を出た。

「まいったな…。つか、なんで警察に言わないんだ…」

「ブツブツ言いつつも、ナオトはアリアハンビルを目指した。

「誘拐なんて…ぶっそんな世の中だなあ…」

テクテク歩いていると、がらの悪そうな少年たちが3人ナオトに近寄ってきた。

「よお、おっさん」

「…」

「悪いんだけどよ、ちょっと俺ら腹減っててさあ」

「…」

（あーあ、面倒なのに捕まったなあ…）

「財布あったら貸してくれねえかな？ちゃんと後で返すからさ」

「…」

ナオトは迷った。しかし

「とお！」

ナオトは逃げ出した！

「あまいぜ！」

しかし、回り込まれてしまった！

ヤンキーAの攻撃！バキッ！3のダメージ！

ヤンキーBの攻撃！バキッ！4のダメージ！

ヤンキーCは身を守っている。（なんでや！）

「くそ！」

こうなったら仕方ない。反撃するしかない。その時！

「やめなさい」

突然、神父のような格好をした男が現れた。

「なんだ、てめえ！」

「ふん！」

その男は杖を振り回し、ヤンキーどもを威嚇した。

「去るのです。天罰がくだりますぞ！」

男は鋭い目でにらみつけた。

「…」

ヤンキーたちはただならぬ威圧感を感じた。そして

「くそ…！覚えてやがれー！」

ヤンキーたちは逃げていった。

「…」

ナオトはひと安心した。

「大丈夫ですか？」

「ええ…ありがとうございます」

「ケガは？」

「まあ少しね…」

「そうですか。では、じっとして」

「？」

その男は目を閉じ、つぶやいた。

「神よ、この哀れな子羊を癒したまえ…」

すると

「…？」

なんと傷が癒えた。

「ええ！？」

「これでよし」

「あなたはいつたい…」

「私は僧侶のすけぞう。すけさんと呼んでください」

「す、すけさん…？」

「むむ…感じますぞ。あなたは今とても困っている様子」

「…」

「私も一緒にしましょう。よろしく」

「ま、まじっすか！？」

ナオトは驚いたが、さっきの能力は役に立つと考え、一緒にアリアハンビルに行くことにした。

歩きながらナオトはすけさんに事情を話した。

「ふむ。誘拐ですか。それは卑劣な」

「ですよね」

「犯人の手掛かりはないのですか？」

「ええ、まったく。部長も無茶なことを僕に頼んだものです」

「まあ主人公は、無茶なことを頼まれるもんですから」

「主人公？」

「ゴ、ゴホン。なんでもないです…」

「…」

そんなこんなで二人はアリアハンビルに着いた。3階建ての小さ

なビルだ。

「ん？」

ドアがある。黄色いドア…。

「まさか…」

ナオトは盗賊の鍵を使った。

”ガチャ”

なんと開いた。

「！」

ナオトは驚いていた。

「さあ、行きましょう」

すけさんは驚いていなかった。

「え？ええ、そうですね…」

ナオトは色々言いたいことがあったが、もう色々あきらめた。むしろ開き直ってこの世界を楽しむことにした。まだ完全にはふっきれてはいないが…。

「しかし…閑散としていますね」

ナオトが言った。

「おそらくここはペーパーカンパニービルでしょう」

「なんですか？それ」

「政治団体や怪しい宗教や恐い組織や…まあ胡散臭い人たちが何らかの形でダミー会社を作るためのオフィスビルでしょう」

「そんなものがあるんですか？」

「私も噂で聞いたことがあるだけで、実際見るのは初めてですが」

「ここがそのビルだと…？」

「こんなに人がいないのは不自然だし、ドアには聞いたことのない企業名がたくさんあるし…多分そうだと思いますよ」

「へえ…。と、あれは…？」

見ると、あるドアに張り紙があった。

”シライシ、ここに入れ”と書いてある。そして黄色いドアだった。

「なんか…相手の思いつぼのような気がするけど…」

「仕方ありません。入ってみましょう」

「そうですね」

ナオトは鍵を使い、中に入った。

「……」

机がひとつあり、電話が置いてあった。ロッカーもひとつだけあった。

「……」

ナオトとすけさんはあたりを見渡した。しかし何も見つからなかった。

「うーむ……」

その時

”プルルルル……”

電話が鳴った。

「……」

ナオトは迷ったが、数回呼び出し音を聞いたあと、電話にでた。

「もしもし……」

「もしもし、シライシか？」

「いや…私はシライシ部長の部下のタケダナオトだ」

「ほう。シライシの命令で来んだな」

「そうだ」

「なかなかの勇者だな」

「……」

「要件を手短に言う。今日の夜10時、現金1000万を持って、2丁目にあるバー”アツテムト”にお前ひとりで来い。そこはすでに廃業しているが、お前が今いる部屋のロッカーにそのバーの入口の鍵がある。了解したか？」

「……」

「返事は？」

「分かった……」

「よし。妙なことをしたら部長の娘は殺すぞ。いいな」

「わ、分かった」

「じゃあな」

電話は切れた。

「…」

犯人から…ですか？

「ええ…」

ナオトはロッカーを調べた。なんと魔法の鍵を手に入れた！

ナオトはすけさんに会話の内容を話した。

「そうですか…」

「はい。とりあえず会社に戻ります。部長にもこのことを話そうと思いますし」

「分かりました。でもナオトさん、ちょっと待っていてください」

「？」

すけさんは携帯電話を取り出し、何やら電話した。

「…」

「よし。では外に出ましょう。そして20分ほど待ちましょう」

「…？」

ナオトは外に出て言われた通り20分待った。すると

「おお、来た来た」

何やら占い師っぽい服装をした女性が現れた。

「悪いなナンシー」

「ナンシー？」

「こんにちは、私はナンシー、魔法使いです」

「ま、魔法使い…？」

「そうです。ちなみに日本人とロシア人のハーフです」

「そのわりには名前がアメリカ人っぽいな…」

「ナオトさん、彼女はルーラの呪文が使えるんです。わざわざ徒歩で帰ることはないですよ」

「ル、ルーラ？」

「ナオトさん、では帰りたい場所の位置を思い浮かべてください」

「は、はあ…」

ナオトは目をつぶり、自分が働く場所の位置を思い浮かべた。三人は手をつないだ。

「…、ルーラ！」

「!？」

三人の体は空へと舞い上がった。

”ザッ”

「…」

ナオトはおそろおそろ目を開けた。

「!？」

なんと、そこはまぎれもなくナオトの働く会社の前だった。

「す、すごい…！」

ナオトは信じられなかった。

「じゃ、私はこれで」

「え、もう帰るんですか？」

ナオトはもう少し話がしたかった。魔法のことも聞きたかったし、美人だし。

「ええ。ちょっと悟りの書を手に入れに行くのでね」

「悟りの書？」

「悟りの書だつて!？」

すけさんが驚愕していた。

「ふふふ…」

ナンシーは得意気だった。

「ナンシー、どこにあるんだ!？ついに見つけたのか!？」

「ええ…」

「頼むナンシー、教えてくれ!どこに悟りの書が!？」

「悪いけどすけさん、教えることは出来ないわ」

「く…」

「あ、あの…それって…そんなにすごいものなんですか？」

「おおナオトさん、悟りの書を知らないとは何事だ!」

「……」

「悟りの書があれば、神に最も近い職業・賢者になれるんですよ！」

「はあ……」

「じゃあねすけさん、ナオトさんも、健闘を祈ってるわ」

ナンシーは去っていった。

「くそ……」

すけさんは悔しそうだった。

「こうなったら消え去り草で姿をくらし後をつけてやる……」

何やらブツブツ言っていた。

「……」

「ナオトさん！では、私もこれで。あなたのこれからに幸運を。あと200の経験値でレベルが上がると思いますよ」

「はい？」

「では！」

ナオトは足早に去っていった。

「……」

ナオトはとりあえず部長の元へと向かった。

「おお！ナオト！無事帰ってきたか！わしはとても嬉しいぞ！」

「はあ……」

「で、どうだった？」

ナオトは一部始終を話した。

「1000万……」

「はい」

「どうしますか？僕は警察に言ったほうがいいと思いますが……」

「いや、駄目だ。犯人を怒らせて娘を殺されてしまったら……わしは

……わしは……」

「……」

「仕方ない。夜までに金は用意する。君はそれまで待機しておいてくれ」

「分りました」

部長はオフィスから出ていった。

「…」

ナオトは不安だった。けど行くしかない。そう思っていた。

「腹減ったな…」

ナオトは愛妻弁当（恐妻弁当とも言つ）を取り出し、美味しく食べた。

果たしてどうなるのか…？

そして夜9時。

「…」

オフィスでひとり待つナオト。他の社員は帰っていた。今頃、家でファイナルファンタジーでもやっているのだろうか…。

「はあはあ…待たせたな、ナオト君」

汗だくのシライシ部長がボストンバッグを持って入ってきた。

「部長…」

「なんとか金は用意できたぞ、はあはあ…」

「すごいですね…」

「ああ…君ら平社員とは給料が違うからな」

「うっぜ…」

「とにかくこれを持って、娘を取り返してきてくれ」

「分りました」

「妙なことはしないようにな。人命第一だ」

「はい」

ナオトはバッグを持ち、バー”アツテムト”に向かった。

40分後。

「ここか…」

ナオトはあたりを見渡した。とりあえずアラクレはいなかった。

「よし…」

ナオトは魔法の鍵を使った。

”ガチャ”

鍵が開いた。

「よし…行くぞ」

店内に入ったナオト。薄暗い。たいまつは持っていない。

「すいませーん」

返事はない。ただの留守のようだ。

「すいませーん」

すると…

「来たか…」

奥から犯人と部長の娘エリカが出てきた。エリカはロープで縛られている。そしてなぜか白いドレスを着ている。

（なんであんな格好なんだ…）

「よく来たな。勇者ナオト」

犯人は銃を持っていた。

「別に…勇者じゃないけど…」

一応、反論してみた。

「俺はクロダ。いわゆるラスボスだ」

「…」

ナオトはもう世界観なんてどうでもよかった。

「それで…お金はちゃんと持ってきたんだろうな？」

「ああ、これだ」

ナオトはバッグを見せた。

「よし。そのバッグをカウンターに置け。そしてそっちの壁際まで下がるんだ」

「分かった」

ナオトはバッグを置き、壁際まで下がった。

「そのへんにある壺は調べるんじゃないぞ」

「…」

ナオトはじっとしていた。まあ、抵抗するつもりも、攻撃するつ

もりも、ツボを割るつもりもさらさらなかったが。

ラスボス・クロダはバッグの中身を調べた。

エリカは涙目でこっちを見ていた。

「…」

クロダは険しい顔になった。

「？」

「てめえ…」

クロダは怒っているようだった。

「これは何なんだよ！」

「？」

ナオトは来る途中、中身を調べている。間違いなく現金1000万エンのはずだ。

「てめえ…」

「な、なんだよ…ちゃんとお金が入ってるだろ？」

「てめえ…これは…1000万エンじゃねえか！俺が欲しいのは1000万ゴールドだ！バカヤロウ！」

「…」

ナオトは思った。この世界、駄目だ…。

しかしナオトは知らなかった。

仮にここをうまく切り抜けても裏ボス・アヤコ（恐妻）がいることを…！

アヤコ

「あのクソガキ…こんな遅くまで何やってる！浮気だな！帰ってきたらギッタンギッタンにしてやる！」

・
・
・
おしまい
・
・
・

(後書き)

ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6176v/>

現代社会 + RPG

2011年8月8日13時42分発行